

特集 建設業への理解促進を目指す 第2回

# けんせつ小町 活躍現場見学会



昨年に引き続き今年も夏休みシーズンに合わせて行われた「けんせつ小町活躍現場見学会」。女性が活躍する現場の姿を伝えるために開催された女子小中学生限定の現場見学会だ。全国15カ所の会場には、保護者を含め延べ414名の参加者が足を運び大盛況だった。建築、土木の現場でけんせつ小町たちは何を伝えようとしたのか。元気いっぱいの子供たちはそこでどんな新しい発見をしたのか。見学会会場からレポートする。



【7月29日】  
（仮称）HC大成有楽  
浦和駒場計画新築工事  
（長谷工コーポレーション）



【7月28日】  
目黒駅前地区  
第一種市街地再開発事業  
施設建築物新築工事  
（大成建設）



【7月27日】  
仙台湾南部海岸深沼南工区  
井土浦地区堤防復旧工事  
（前田建設工業）



【7月25日】  
東京外環自動車道  
市川中工事  
（鹿島建設）



【7月23日】  
広島駅南口Cブロック  
第一種市街地再開発事業  
施設建築物新築工事  
（戸田建設）



【7月21日】  
中村中部雨水幹線  
下水道築造工事  
（安藤・間）



【8月2日】  
北海道横断自動車道  
天神橋(PC上部工)工事  
（三井住友建設）

空間との関わりを想像でき、建築を身近に感じられたはずだ。明日から建物を見る目が変わったとしたら、それはこの見学会の大きな成果と言える。

一方、「土木」の現場は広大で、全体を把握することが難しいかもしれない。しかし、そのダイナミックなスケール感から、土木が社会基盤整備という重要かつ壮大な使命を担っていることを体感できたのではないだろうか。

参加者からは多くの熱いメッセージが寄せられ、「女性活躍する現場の姿」を伝えることができたと。小町たちも十分な手応えを感じながら、まだまだできることがあると意気込んでいる。「一年後

# Girls SITE

ガールズ+サイト

## けんせつ小町 活躍現場見学会 開催一覧



【8月4日】  
安威川ダム  
建設工事  
（大林組）

の現場をもう一度見せてあげたい」「場内のプラントや設備についても説明したかった」。そうした希望が、今後の見学会、広報活動につながっていくに違いない。

会場には新聞社やテレビ局の記者も数多く取材に訪れていた。建設現場の女性専用トイレ事情など各社ユニークな視点で取材をしてきたようだが、共通するテーマは建設業界における「担い手の確保と育成」だと口を揃える。ある記者は、「小町見学会は子供たちの将来に深く関わる試みだが、小町自身も担い手。未来を担う子供たちとともに、現時点で業界を牽引する小町の活躍ぶりを紹介したい」と話してくれた。

「建築」の現場は、参加者にとっても自宅や学校など日常的な生活

### 「リアル」にふれる見学会 女子限定！建築土木の

今年けんせつ小町活躍現場見学会は、昨年に続き国土交通省の後援を仰ぎ、前回は上回る全国一五カ所の現場で展開、四一四名が参加した。見学会を受け入れる現場に画一的なカリキュラムはない。それぞれが工夫を凝らし「この現場ならではの」を演出した。どの会場からも、普段は仮囲いで閉ざされている現場をこの日ばかりはオープンにして、未来の担い手たちにたっぷり建設業を感じて欲しいという想いが伝わってきた。



【8月30日】  
ささしまライブ24  
グローバルゲート  
（竹中工務店）



【8月5日】  
（仮称）北里研究所  
白金キャンパス薬学部校舎・  
北里本館建替新築工事  
（戸田建設）



【8月8日】  
阪急京都線・千里線淡路駅  
周辺連続立体交差工事  
（第2工区）に伴う土木工事  
（奥村組）



【8月10日】  
東京港クルーズ  
海の建設現場見学会  
（五洋建設）



【8月23日】  
長崎県庁舎  
行政棟新築工事  
（鹿島建設）



【8月24日】  
（仮称）東映アニメーション  
新大泉スタジオ計画  
（清水建設）



【8月26日】  
渋谷駅南街区プロジェクト  
新築工事  
（東急建設）



安威川ダム（大阪府茨木市）のけんせつ小町たち。どの見学会でも、巨大な重機や構造物を背景にすると現場のスケールがさらに大きく見える。しかし、小町たちの表情には例外なく現場の迫力に負けないたくましが満ちていた。



今日も一日、  
ご安全に!

朝礼では、二人一組で互いをつないだ「安全帯」を引っ張り合い、緩みや道具の損傷がないかしっかりと確かめる。職人たちは毎朝この朝礼で、今日一日の業務に向け気合を入れる。全員一丸となって安全作業を約束する重要なイベントだ。

# 建設業の魅力伝える 体験プログラム

現場を包む「体感」を  
肌で感じて欲しい

現在、建設業の現場で働く女性の技術者、技能者の数はおよそ一〇万人、全体の約三％というデータがある。決して多いとは言えないが、実際の現場では欠かせない戦力だ。女性に配慮した現場の環境整備も急速に進んでおり、多くの女性たちがさまざまな分野で活躍している。

七月下旬、見学会の会場となる埼玉県さいたま市浦和区の新築マンション建築現場に、二三名の子供とその保護者たちが集まった。全一四六戸のRC造七階建て、延

べ面積二、三〇〇平方メートルの大型プロジェクト。女性ならではの視点を生かし、事業企画から設計、施工、販売まで、全業務に女性スタッフが携わる。まさに「ガールズサイト」の名にふさわしい現場だ。冒頭、早坂淳子所長（株

長谷工コーポレーション）から、約九〇名の職人のうち一五名もの女性が働いているとの説明を受け、参加者たちが意外そうな表情を浮かべていた。屈強な男性職人に混ざって華奢な女性たちがテキパキと仕事をこなしていく、性差を超えた現場風景はまだまだ一般的とは言えないのかもしれない。

見学会は「朝礼体験」から始ま

った。毎朝、現場入りする九〇名前後の全職人が会社ごとに列をつくり、リーダーが順番に当日の作業内容、人員数を声高に申告する。工務店、建材や電気を扱う協力会社の列の間に、参加した子供たちも「けんせつ小町」として整列。

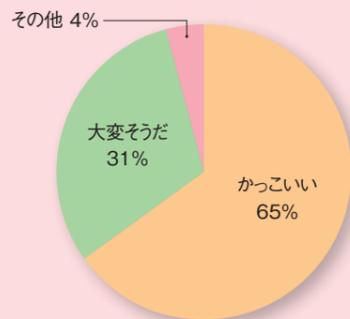
見学者の一人が「けんせつ小町見学会一四名！ よろしくお願います！」と、はにかみながら、それでもしっかりと挨拶した。

引き続き二人一組になって互いに安全装備を確認。向かい合って「ヘルメット良いかっ！ 足元良いかっ！」。見学者たちも見よう見まねで唱和する。早坂所長はこ

の朝礼を何としてもプログラムに加えたかったとこう話してくれた。「建築現場には多くの職人さんが携わっていること、全員が志を一つにしてこの建物をつくっているということを感じて欲しいかったです」。

朝礼の締めくくりは、とびの親方の「小さい小町に気を取られて蹴つまずいたりしないようにっ！ 今日一日頑張るぞ！ ご安全に！」という威勢のいい号令だ。これを合図に各自が持ち場に散っていく。参加者たちも二つのグループに分かれて現場見学がスタートした。

## 現場で活躍する女性をみて どう思いましたか？



※参加した子供たちのアンケート  
※複数回答可



女の人がたくさんいてびっくりした。見学会もとても楽しかったので、建設現場で仕事をしてみたい。

昨年、建築と土木の違いを知ったので、今回は土木の現場を見学した。小町が活躍するダイナミックな現場を見学できて良かった。





自動で鉄筋を束ねる鉄筋結束機も体験。

# 職人の技術に触れる

## 建築現場

快適な自宅も、日々通う学校も、カタチにしたのは「建築」

手始めに五〇シのクロローラーレーンが資材を揚重する様子を見学する。担当小町の岩崎夕佳次席がクレーンの操作には専門資格が必要なことを説明すると、参加者たちが感心した面持ちでオペレーターのクレーンさばきを改めて見つめる。クレーンに吊られて頭上を横切っていく鉄筋を目で追いながら、周囲に注意を促すホイッスルを懸命に吹き鳴らしていた。

その後、工用エレベーターで上階に上がった。一階はすでに居室の体を成していたが、二、三階はようやく型枠が取れたタイミング。最上階は炎天下で型枠工事の真っ最中だ。上階に向かうにつれ、時間を遡るように建築の工程を見ることが出来る。かろうじて室内の区分けだけはわかるようになった空間で、岩崎さんが「ここが玄関この廊下を進んでいくとこの辺りがリビングルームだね」と身振り手振りに加え、平易な言葉を選びながら丁寧に説明していた。

部材を施工する手順を岩崎さんが説明。ディテールまで細かく解説していく。「壁ってコンクリートでできているの？」と尋ねる子がいた。「そう。このコンクリートにボードを張って、さらに綺麗な壁紙で仕上げると『部屋』が出来上がります」。見慣れた自宅の部屋の裏側がコンクリートで形作られ

ていることを、実感として理解できたはずだ。「現場」というテーマパークで「建築」をより身近に体感する

もうひとつ、建築の見学会会場は東京都港区で進む研究施設の新築工事現場だ。北里研究所白金キ



鉄筋を結束する道具「ハッカー」がクルクルと回ってしまいうまく扱えない。それでも何度も挑戦。なんとか締め付けることができたときによく笑顔を見せた。TVゲームのステージをクリアしたような面持ちだった。

ジャンパスの薬学部校舎・本館を建て替え、地上三四階、高さ七〇メートルのランドマークを建設している。見学会の冒頭、案内役の野口若菜さん（戸田建設㈱）は、「けんせつ小町」とは建設に携わるステキな女性たちのことです。建築は女の人でもできる仕事なんだということをごひ見てください」と洗刺と子供たちに言葉を贈った。

四、七〇〇平方メートルあまりにおよぶ現場では、基礎工事が完了し、上空に向け建物の骨格が見え始めている。現場を一望できるポイントで、その広さに見学者たちが驚きの声を上げた。現場の迫力は十分伝わってきたが、さすがに施工中の現場で所要所要を巡ることは難しい。その制約を逆手にとったことが奏功して、この会場は体験型の見学会になった。現場事務所の前に「とび」「鉄筋」「左官」「測量」「高所作業車」のコーナーを設け、それぞれの職人が子供たちにプロの技を伝授する。

「てっぴんコーナー」では、結束線とハッカーを使って、鉄筋が交差している箇所をガッチリと固定

外装のタイル貼りに挑戦。「家の壁もこうやってできていくんだ」。



建物を支える免震装置に手を触れる。普段は見えないところで最先端の建築技術が暮らしの安全を支えている。



建物って、人の手で少しずつつくっているんだね。

建物ができていく様子を、実際に目で見て理解する。

セメントと水、砂利を混ぜ、コンクリートが出来上がる仕組みを体験。

固まる前の  
コンクリートって柔らかい!



# 初めての景色に触れる 土木現場

## 「土木」を体感する インフラを担う

見学会は土木の工事現場でも開催された。その一つ、千葉県市川市の東京外環自動車道市川中工場の会場には二〇名以上の参加者が集い、「土木」とは何かというレクチャーから見学会は始まった。けんせつ小町の鈴木ひかりさん（鹿島建設株）が「皆さん、ドボク、という言葉を知っていますか？ 今日見ていただく現場は高速道路の建設現場です。私たちは皆さんが『こんなモノがあったらいいな、便利になるだろうな』と思っている、とても大きな施設をつくって

いるんです」と語りかける。続けて、なぜ外環道が必要なのか、道路整備の効果について噛み砕くように説明を加える。「東北とか遠いところから西側に行くときに、東京都内の道路を通らなくて済む早く行けるようになって、都内の道も混雑しないし、より安全になるよね」。

子供たちは二班に分かれて現場へ。大地を切り開き、細長いコンクリートの構造物が遙か彼方まで延びている風景に驚いた様子だった。地上から近い将来「道路」になる施工エリアに降りていく。「慌てない、押さない、走らない」が約束です。みんな気をつけて

する作業に挑戦。くの字型のハツカーは大人でも扱えるようになるまでには時間がかかる。職人が文字通り手取り足取り丁寧に教えていくがなかなか上手く締め付けることができない。「もう一度やってみよう」と声をかけ続ける。子供たちはできないことを原動力にして、もう一度を何度も繰り返す。その姿が実に楽しげに映る。「自分もそうでした。親方に一通りや

り方を教わったら、あとはその辺の公園で黙々と練習してたもんです」。単純な作業だからこそ熟練するには、そのコツを感覚的に体に覚えこませるしかない。「できなくてもみんな真剣に、一生懸命やってくれましたよ」と顔をほころばせた。

大きなパレットに無造作に盛られたコンクリートを、コテを使って均していく「さかんコーナー」。

職人がまず手本を見せる。あつという間にガサガサだった表面が、鏡のようになめらかになった。子供たちが挑戦するがやはり上手くいかない。そこで改めて説明を加えながら、再度均し方を伝授。「最初はコンクリートを大雑把に均して、それからペタペタと軽く叩く。水が浮いて表面が柔らかくなったところでコテを少し浮かせるようにして平らにしていくんだよ」。子

供たちがなるほどという表情を浮かべながら再挑戦する。「おお、うまい、うまい。明日から現場を手伝ってよ」という職人の声に、子供たちの笑顔が弾けた。

最後に野口さんは「建物は人がつくっているということを知ってほしい。一〇年後、仕事を選ぶときにこの現場のことを思い出してくれれば」と期待を込めた。



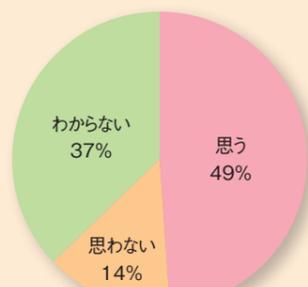
上/測量機を覗いて身の回りの空間の大きさを調べる。  
下/重量物を吊り上げるための「玉かけ」を体験。一見、簡単そうに見えるが、現場の安全確保に欠かせない重要な作業だ。

実際に現場の作業を体験することができて良かった。職業選択の参考になったらしいなど思う。



私は文系出身なので、子供に考え方を広めて欲しいとの思いから参加した。

## 将来、建設業で働いてみたいと思いますか？



※参加した子供たちのアンケート



広大なダムを飛び回る  
ドローンも見学会に登場。

大阪府茨木市のダム現場でも見学会は五〇名近い参加者で賑わった。一昨年着工した安威川ダムは、立案から四〇年以上を経た地元悲願ともいえるダムで、注目度は高い。現場には隣接してダム資料館も常設され、見学会やイベントも頻繁に開催されている。

事前に現場事務所の会議室で行われた説明会では、西田理佐さん（株大林組）が、ダムの整備目的などに加え、工事概要についてその巨大さを強調しながら解説してくれた。「ダムの高さは二〇階建てのビルぐらい。京セラドーム二杯分の大きさになります。現場内を走り回っているダンプカーのタイヤは大人の背丈と同じぐらいの大きさです」。正直、子供たちはキョトンとした様子。しかし、「今、ダムはブームになっていて、ダムの

形をしたダムカレーやダムケーキが人気なんです。ちなみにダムケーキを今日のお土産として皆さんにプレゼントします」という話を聞くと大きな歓声が上がった。「今日一番のレスポンスですね」と小町が苦笑した。

それでも、現場での重機の試乗体験になると、子供たちの表情が一変する。見上げるほど大きな工事用車両、重機に目をむいていた四立方メートルの土砂をすくい上げるバックホウは、他の工事現場でもなかなかお目にかかれない代物だという。ダンプは大きすぎて一見して運搬車両には見えないほどだ。「何これ！ こんなの見たことない」「普通の道路を走れるの？」と子供たちから声上がる。一行はにわか活気付き、重機に手を触れ、それを背景にそこかしこで写真を撮り始めた。

現場には遮るものがなく、この日も猛暑日だ。容赦なく強烈な日差しが降り注ぐ。それでも子供たちは汗だくになりながら、ダム現場のスケール感を体感したようだった。

ダム現場では巨大なバックホウに遭遇。



こんな大きな機械、  
どうやって動かすんだろう？

### ダム現場のスケールの大きさに感動

海上工事の現場では土砂を受け入れる特殊な作業船を見学。海上に浮かぶ工場のような船のスケールに目を見張った。海の上にも現場があることを初めて知った。



ヒトデや貝殻でデコレーション。  
東京港に棲む生き物を学ぶ。



と小町がメガホンで呼びかける。子供たちはコンクリートの回廊を見上げながら「高速道路」の現場に立ち会っていた。

### 子供たちと保護者に向け 建設に対する 理解の裾野を広げる

現場内には「おしごと体験コーナー」が設けられていた。屋外の工作室のような一画では、コンクリートで手のひらサイズのフォトスタンドをつくる。自分で練ったコンクリートを、ケーキカップに流し込む。ビーズなどで飾りをつけ、クリップを埋め込んで固まるのを待つ。しばらくしてカップを外せば夏休みの宿題工作の出来上がりだ。型枠代わりのカップを使い、コンクリートで自在に立体をつくる工程を学ぶことができた。

「墨出し」の体験コーナーでは、墨つぼを使ってあらかじめマークされたポイントを線で繋いでいく。子供たちは初めて手にする墨つぼだが、要領がわかってくるとどんどん自分たちで線を引き始める。完成した線画を塗りつぶすと巨大



けんせつ小町に教わりながら、墨出しに挑戦する。

なアニメキャラクターが浮かび上がった。

市川の見学会場では小町と保護者が言葉を交わしているシーンを何度も見かけた。小町たちは、保護者から発せられる業務内容や技術的な問いかけに気さくに答えていた。後から鈴木さんが、今は建設に対する理解の裾野を広げていくときだと、こう話してくれた。「子供たちはもちろん、お母さん方にももっと興味を持ってもらいたいんです。親御さんの影響は大きい。お母さんが我が子に弁護士やお医者さんといった職業を目指

# 小町のたまごの世界が広がる。



目の前で瞬間に固まっていくコンクリートを目撃。オリジナルのフォトスタンドが完成。

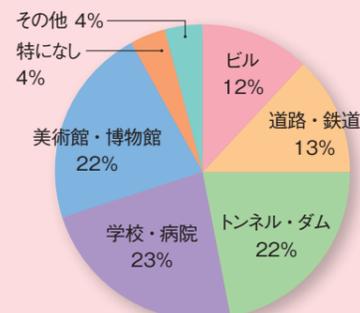


けんせつ小町の説明に真剣な表情を見せる子供たち。



海上工事の目的や、作業船の仕組みの説明に興味津津の見学者たち。

## 次に見てみたい現場はありますか？



※参加した子供たちのアンケート  
※複数回答可



海の生き物に触れる。現場では環境への配慮が欠かせない。



仮設の足場に恐る恐る登り、職人が動く世界を肌で感じた。

ろうか。「私たちはダムをつくることだけが仕事じゃないんです。残念ながらダム現場には自然環境や就業環境との関わりで、未だにマイナスイメージを持たれている方もいらっしゃると思います。そうした皆さんにダムの重要性をお伝えすることも大切なことです」と西田さんは言葉に力を込める。その成果は今日この現場に触れた子供たちの表情に表れていたことを改めて思い返した。

この見学会の目的は、当然のことながら、技術的なスキルの習得や知識を伝えることではない。コンクリートや重機に触れ、道具を手にする事で、「現場」を体感することに意義がある。どこの会場でも小町たちは参加者の興味の手を聞くことに専心しているように思えた。

「できない」「わからない」。だからこそ挑む。もっと知りたいと思う。一度開け放たれた扉に向け、継続的に建築や土木の楽しさ、そして大切さを伝え続けていくことが今後の課題になるのかもしれない。

真剣な表情から一転、現場スタッフの冗談に笑みがこぼれる。

みんなの生活も自然の生きものも考えているんだね!



見学会出発前に耐震の講義を受ける。「頭」で理解し、「体」で感じる見学会だ。

## 「なるほど」という表情。現場に子供たちの笑顔が溢れる。

「つくる」だけが仕事じゃない

資料館での質疑応答は、オープニングの説明会とは様子が違った。「けんせつ小町は全部で何人いるの?」「日本のダムの始まりはいつ頃?」「現場に動物がいたらどうする?」といった質問が矢継ぎ早に投げかけられる。小町たちは丁寧に答えながら最後にこうあいさつした。「今日現場で出会った出来事を、学校の友達や仲間たちに話してあげてください。皆さんとも一〇年後にけんせつ小町として再会することができればとても嬉しいです」。子供たちはこの言葉に頭を縦に振って応えてくれた。マイクロバスで現場を後にする子供たちが、そして送り出す小町たちも、互いの姿が見えなくなるまで手を振り合っていた光景が印象的だった。

西田さんにいささか意地悪な質問をしてみた。安威川ダムは完工までに七年あまりを要するビッグプロジェクトだ。見学会やイベントは工事の進捗に影響はないのだろうか。